

伊勢湾台風 再現

列島縦断の様子3D映像に

名大チーム

台風被害では過去最悪の5098人の死者・行方不明者を出した

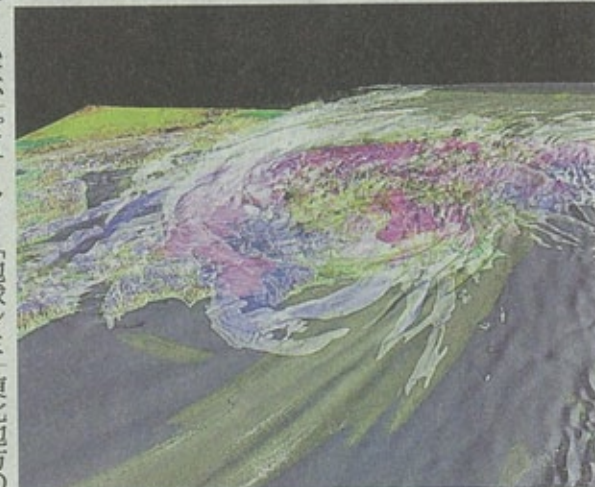
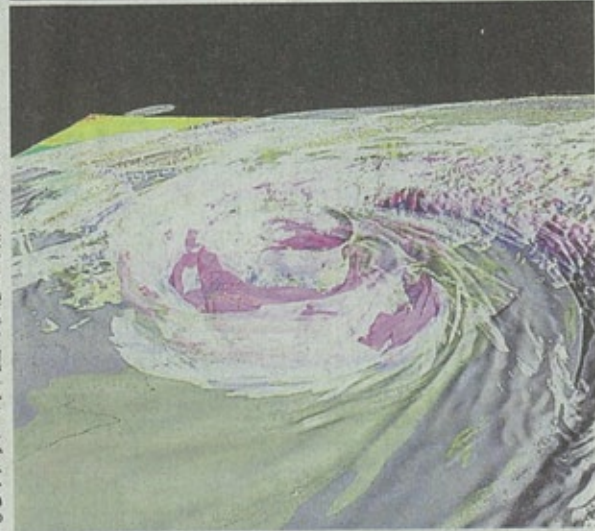
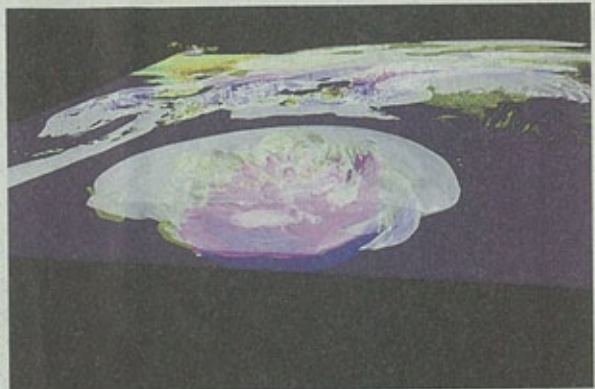
伊勢湾台風(1959年9月)が日本列島に上陸、縦断する様子を立体映像で再現したと、名古屋大などのチームが発表した。チームによると、上陸時の様子を高精度に再現したのは初めてで、「将来もっと強い台風が似た進路を取る可能性もあり、結果を防災に役立てたい」と話す。

気象庁によると、伊勢湾台風は中心気圧が最も低いときで895hPa、最大瞬間風速は伊良湖(愛知県)で55・3hPaを観測。暴風域が広く、九州から北海道まで全国各地で30hPa

常にな少ない。チームは、気象研究所(茨城県つくば市)が持つ気温や風、気圧などのデータを使い、スーパーコン

ピューター「地球シミュレータ」で三次元(3D)映像を作製した。台風が太平洋上で発生し、愛知県に上陸、

東北地方の北部を通過して太平洋に抜けるまでの約3日分を再現。上陸時は、最も勢力の強い時期は過ぎていたも



①太平洋上で発生した伊勢湾台風②日本列島に近づいて、愛知県に上陸し③東北地方へ北上する様子、を再現した三次元映像一名古屋大地球水循環研究センター提供

の、台風の目が見え、非常に強い勢力を維持していた様子が分かる。伊勢湾台風のような極めて強い台風は「スーパー台風」と呼ばれ、地球温暖化が進むと発生が増える可能性がある。チームの坪木和久

・名古屋大教授(気象学)は「シミュレーションの結果と実際の伊勢湾台風の被害のデータなどを組み合わせることで、将来の台風被害を予測できる」と話す。【大場あい】

デジタルプラス 動画